

氏名(国籍)	金 <sup>きむ</sup> 榮 <sup>よん</sup> 哲 <sup>ちよる</sup> (韓国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博乙第1,354号
学位授与年月日	平成10年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	西鶴浮世草子の研究
主査	筑波大学教授 池内輝雄
副査	筑波大学名誉教授 桑原博史
副査	早稲田大学教授 文学博士 谷脇理史
副査	筑波大学教授 博士(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 稲垣泰一
副査	筑波大学教授 犬井善壽

## 論文の内容の要旨

本論文は、西鶴浮世草子の主要な作品をとりあげ、主としてその方法の問題を中心に各作品の特質を解明し、同時にその方法を生み出す作者の創作姿勢や現実認識の構造を追尋する六章、及び終章よりなる。

第1章「西鶴文学の方法」は、本論文の序章とも称すべく、本論文全体に関わる著者の問題意識を提示する。そこでは、西鶴浮世草子の方法を究明することの必要性が、従来の研究の不備を例示しながら強調され、各作品個々の方法をより綿密に解明することによって、多様な方法の把握が可能となることが論ぜられる。さらに、その多様な方法の創出には、先行文芸や既存の巷説への読者の認識を相対化する創作姿勢、常に物事の一面を把握するのみに終わらぬ現実認識のあり方等が関わり、その結果、二重のイメージを介して作品の豊かさや幅の広さが生み出され、西鶴以前には存在しない作品の特質が創出されたとする。

第2章「一代記形式の二重構造」では、第1節で『好色一代男』が、第2節で『好色一代女』がとりあげられる。第1節では、『好色一代男』と先行文芸（『源氏物語』・『伊勢物語』・『古今集』・謡曲など）との関連を詳細に論じ、そのパロディのあり方が問題とされ、先行文芸への読者の知識が前提となることで二重の面白さが生ずる様相の分析が行われる。さらにそれらが一代記形式の枠組の中で生かされることによって、作品全体に二重のイメージを生み、仮名草子の平板さを超えた世界を創出したとする。また、先行文芸の辞句や内容のパロディのみならず、夢幻能の構成との関連等をも問題とし、従来一代記としての破綻と見られることの多かった『好色一代男』巻四以前（前半）と巻五以後（後半）とのあり方が、夢幻能の構成を意識しての導入とする仮説も提示される。第2節では、従来『好色一代女』の一代記的構成の中で語られる懺悔の内容から主人公の悲惨な境涯が論ぜられることが多かったのに対し、巻一の一及び巻三の一の冒頭部に見られる西鶴の女性認識に着目し、それが各章での主人公のあり方や、各章を展開する一代記構成の中に生かされていることを解明する。また、それが『好色一代女』の風俗小説的側面を生み出す要因となり、種々の人間群像をも有効に導入しえて、作品に厚みを加える結果となったと論ずる。

第3章「際物の方法と移り気」は、『椀久一世の物語』と『好色五人女』をとりあげる。ともに実在の事件を扱い、事件後だけに執筆・刊行された際物と称される作品であるが、本論文での究明の方法はそれぞれで少し

異なる。第1節「『椀久一世の物語』の夢と狂気」は、作品構成の基調として謡曲『邯鄲』ならびに『芦刈』の導入を見ることが出来るとし、両者を導入する必然性を述べ、辞句や内容、構成のあり方の類似を通して著者の新説を論証し、従来のモデル詮索やリアリズム小説と見る批評からは把握しがたい本作の特質を明らかにしている。第2節「『好色五人女』と移り気」は、巻二や巻五に見られる「移り気」なものとす西鶴の浮世や人間に対する認識の表白を出発点として、そのような認識が『好色五人女』の主人公たちの行為のあり方に生かされていると分析し、作中の一見現実離れた行為の描写も移り気な人間模様の体現と見る。

第4章「雑話物の現実認識」の第1節「『西鶴諸国ばなし』の基底」は、人間の欲望に対する西鶴の冷徹や認識が基底となっている短編若干を分析検討して作者の意図を見定め、同時に典拠との関連を問題にしなが、従来の説話とは異なった西鶴の咄の特質を解明する。第2節「『紫女』の方法」は、『西鶴諸国ばなし』巻三の四をとりあげ、従来その典拠と指摘されて来た『御伽婢子』の「牡丹の燈籠」（『剪燈新話』）「牡丹燈記」の翻案作品よりも、同話を朝鮮の金時習が翻案した『金鰲新話』（1653年の和刻本あり）中の「萬福寺橋浦記」の方が典拠とされた可能性が高いとする。と同時に、「萬福寺橋浦記」と「紫女」の方法の類似を指摘し、比較文学的な考察を加えている。第3節「『本朝二十不孝』と世相風俗文」は、咄の展開に直接かかわらない世相・風俗論評の部分が作中で持つ意味を問題とし、それらが咄の展開と相関関係を保って作品に厚みや幅を加え、同時に、そのような咄と世相風俗文とを相関させる方法が町人物の出発点となったとする。

第5章「『武道伝来記』と『平家物語』」は、西鶴武家物の代表作『武道伝来記』と『平家物語』との関連を論ずる。『武道伝来記』は従来、その素材とした敵討事件への究明が行われては来たが、出版禁令等との関連で、事実をそのまま取り入れることが許されぬ当時、その素材となる敵討事件の究明はすこぶる困難であった。そこで著者は視点を変え、実在事件をフィクション化する過程で『平家物語』と関わると見られる作品四章をとりあげて分析検討し、そのフィクション化の様相を明らかにする。さらに、『平家物語』の武家たちの厳しい生のありようが、泰平の御代の武士たちを暗示的に属する役割をも持つとする。

第6章「町人物と教訓の性格」は、『日本永代蔵』および『世間胸算用』をとりあげる二節からなる。『日本永代蔵』の評価は、従来その教訓性・実用性を強調する見解と、逆に、それらの存在を軽視する見解とに分かれていたが、著者は、当時に常識的な教訓的言説そのものよりは、展開される咄自体の中に教訓が存すると論じ、従来の見解を止揚する立場から作品を分析・把握していく。また、『世間胸算用』は従来、教訓性を離脱した作品と把握されて来たが、著者は、その各話の構成や展開過程、描写の手法などの分析によって、人間の本質を読者に認識させようとする作者の意図を把握し、西鶴の人間認識が具体化される咄そのものによって、『世間胸算用』の教訓が読者に暗示され、有効に機能しているとする。

なお、結章は、第2章から第6章までの論旨を要約しつつ、著者の視点、作品把握の独自性等を強調する結論と称すべきものである。

## 審査の結果の要旨

昨今の西鶴浮世草子の研究は、少しく停滞気味との世評がある。資料は出つくし、作品評価は論者によって極端に分かれてかみあわず、重箱の隅をつつくような典拠研究や旧套を脱しえぬ作品論のみが全盛、といった研究状況を省れば、その世評も故なしとはしない。

本論文は、そのような研究状況を認識し、それを克服する視点を積極的に求めようとする意欲的なものである。その全体を貫くのは、西鶴浮世草子の方法を新たに解明しようとする問題意識であるが、とりあげられる問題は、大きく見て、二つの方向から追尋されている。

一つは、先行文芸や街談巷説など、読者に既知のものを前提として、それが利用される様相を解明し、その意味づけ、方法としての新しさを把握して行くものであり、第2章第1節、第3章第1節、第4章第1節、第2節、

第5章がその方向をとる。この方向は、従来も行われていたものであるが、本論文は、それらを単なる典拠として論ずる域を超えて、作品の構成や作者の認識構造に関わるものとして把握し直して行こうとしている点に独自性が認められる。と同時に、従来指摘されて来なかった先行文芸との関連をも数多く指摘し、先行文芸の存在を以上のように把握する視点から、分析・解明している点も評価できる。『椀久一世の物語』と謡曲、『西鶴諸国ばなし』と謡曲や「萬福寺樗浦記」（『金鰲新話』）・『武道伝来記』と『平家物語』との関連を論ずる部分などが、それに相当する。辞句や話の内容のみから関連づける従来の段階をふみ超えた面を持つ以上の解明は、必ずしもすべてにおいて十全の説得力を持つとは称しがたいものも若干見うけられるが、著者の新見も少なしとせず、現在の研究状況を克服する論として評価できるものとなっている。

もう一つは、従来あまり注目されて来なかった部分に着目し、それらが作中で持つ意味を解明し、作品への新たな試みの視点を提示しようとする方向である。第2章第2節、第3章第2節、第4章第3節、第6章第1節、第2節がそれである。『好色一代女』の巻一の一、巻三の一の冒頭文が作中で持つ意味への論及、『本朝二十不孝』の世相・風俗論評の文言と咄の展開との関連の指摘、『日本永代蔵』『世間胸算用』の咄の内容そのものから教訓性を感じし教訓的言説を超えた作者のメッセージを受けとめようとする作品把握等は、西鶴浮世草子の豊かさ、厚みや幅の広さをとらえ直す有効な視点を提示したものとして評価できる。従来注目されて来なかった部分に着目しているが故に、それらの意味を過大評価しているかに見うけられる点もあるが、それによって著者の新見としての意味が減殺されることはない。

以上、二つの方向から本論文の独自性、その持つ意味を記したが、この成果は、今後の西鶴浮世草子研究に新たな視点を提示するものとして十分の意味を持ち、学会に寄与するところ大なるものがあると思われる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。